上島の文芸

弓削短歌会【弓削】

猛暑日の終れる秋の海の面を鰯の大群きらきらと来る　松本　悦郎

剪定の終りし松の四本に小雨降りくる傷いやすかに　安川二三子

黄砂くる此の二三日中国の発展のいきおい覆いくるとも　和田　綱郎

人間の足音が好きと花の言う蕾つけし菊に今日も水やる　石田冨美子

百日紅（さるすべり）の枝を捲きのぼり実りたる瓢箪形の南京ふたつ　上村美智子

記録破りの炎暑に耐えて熟れ初めし蜜柑に手を添え労をねぎらう　島田　義治

投票日米寿過ぎたる母の票オールひらがな散らばっていし　地元　静子

臙脂色のニッカーズ着けし若き男（お）のドアさりげなし押し開けくるる　橋本喜代子

満九十二嫁女二人に見守られハイカラおかず日にち満喫　平川　房子

猪の掘り起したる黒き土見つつ紅葉の散歩路を行く　福原　洋子

双葉吟社【岩城】

大クシャミ続けて出るや初時雨　児島　泰

掛け声を掛け合い孫の大根引く　林　七重

墨の香や時雨（しぐ）るる今朝の一句なり　古林　幹枝

初時雨濡れて慈顔（じがん）の親鸞像　山元　征子

強がりを胸におさめて初時雨　美濃部妃苗

大根引く瀬戸の島々澄みわたる　森本　伸子

収穫祭大根高く積まれけり　伊佐　幹男

週刊誌頭に駆くる初時雨　森本　和佳

道問えば大根で指す老農夫　田名後篁雨

野良生えの朝顔紫紺初時雨　幸本　孤燈

平成22年度人権作文コンテスト愛媛県大会 優秀賞　受賞

この度、平成22年度人権作文コンテスト愛媛県大会（応募数4，096人）が行われ、審査の結果、弓削中学校2年の益崎成香さんの作文「ばあちゃんへ」が、優秀賞（愛媛県教育委員会教育長賞）に入選しました。

益崎さん、おめでとうございます。

今後のご活躍を期待しております。

愛媛県児童生徒理科作品 優秀賞　受賞

11月13日、第48回愛媛県児童生徒理科作品の表彰式が行われ、弓削高等学校3年の多田雄貴さん、浪切航太さん、阪井志穂さんが「EMの投入でなぜ海が甦ったのか？」という研究題目で高等学校部門の優秀賞に選ばれました。

また、同1年生の越智大貴さん、小林佳博さん、西中一馬さん、宮原啓介さんも「ソレノイド巻数と磁界の関係についての研究」で努力賞に選ばれました。

日本学生科学賞愛媛県審査 優秀賞　受賞

12月8日、第54回日本学生科学賞愛媛県審査の表彰式が行われ、弓削高等学校1年の越智大貴さんと、宮原啓介さんが「村上水軍が見た潮流についての研究」という題目で優秀賞に選ばれました。

かみじま歴史探訪

郷土の先輩たちシリーズ⑪

久保亨校長と師範学校

久保　亨校長

久保亨は明治二十九年に生名島で誕生、久保総本家の十一代目の当主となります。『いきなじまというところ』（森本正勝著）には、久保家について、「河野水軍の一族で、天正十三（一五八五）年豊臣秀吉が四国討伐の際…河野氏の家臣はちりじりに…関ケ原の戦でも毛利氏について…松山において闘ったが再びやぶれ、生名島に…」とあります。亨青年が進学したのは、その先祖が奮戦した松山に創設されていた愛媛師範学校（現愛媛大学）でした。

全寮制の学寮生活は軍隊生活に近いものでした。入学早々に書き始めた『学窓日誌』（大正三年四月十日）には、「九時ラッパノ音消灯ノ旨ヲ告ゲ、身ハジメテ寄宿舎ノ寝台ノ上ニ…」、翌日は、「ラッパノ音ニ故郷ノ楽シイ夢ハ破ラレ」と記しています。

親しい学友と共に青春時代を楽しむこともあり、日曜日には、「友来リテ勝山ニ登ランコトヲ進ム…ソノ誘イニ応ジ午前十時同道登山ス。眺望甚ダ美ナリ…」とあります。

夏期休暇に入る七月二十五日（土曜）には、「七時ヨリ終業式始マリ八時終了。ソレヨリ洋服ヲ和服ニ着替エ、飛ンデ古町駅ニ至リ、…高浜ニ至リ、宇和島丸ニ（九時）乗ジテ今治ニ帰ル…午後三時、今治ヲ発シテ島行東洋丸ニ乗リ、七時半郷ニ帰ル。満目ノ風物皆笑イヲフクンデ予ヲ迎ウ…」とあります。今治まで汽船で行ったのは、当時、まだ予讃線が松山まで開通していなかったからです。夏期休暇が終わると、逆のコースで帰校しています。

夏期休暇直後の九月七日には「休暇中勃発セル欧州戦乱、日・独戦争ノ大体…児童、青年ノ教育ニ如何ナル見解ヲ持ツベキカ」と、第一次大戦の勃発に対して、教育者の卵らしい反応をしています。このころ、師範学校や旧制中学等では、「兵式体操」の名で軍事教練も実施され、柔・剣道も盛んでした。

同年八月には、日本帝国はドイツに対して宣戦布告、たちまち赤道以北の独領の諸島や中国の山東半島の青島も占領、降伏したドイツ兵士の一部は松山に移送されました。

十一月十八日には、「放課後…独逸俘虜見物ニ行ク、銃剣厳シク護衛…少シモ恥ジル気色ナク、吾輩ハ名誉ノ俘虜デアルトイワヌバカリノ顔付キヲシテイタ。…本日、松山ニ来タリシ俘虜数三百十六人」と記しています。

当時の愛媛師範学校の修学旅行はかなり大規模でした。第三学年に進んだ大正五年四月には、『東京、京阪旅行日誌』に二週間にわたる楽しい思い出を書き留めています。

大正七年三月にこの学校を卒業すると、岩城尋常高等小学校訓導を振り出しに、津倉、生名、高田、弓削、北浦、弓削と高等小学校に教員として勤務、昭和十三年四月には生名尋常高等小学校長に任命されました。

でも、その前年、昭和十二年に勃発していた日中戦争は拡大し、昭和十四年九月一日、校長の『日誌』には「興亜奉公日（初回）…二、訓示」とあります。のちの「大詔奉戴日」です。応召で出発する兵隊さんの「歓送」にも、連日児童たちが動員されました。昭和十三年に建造されていた二宮金次郎の銅像も、昭和十六年十二月三日、「近ク献納―代用品」となり、その数日後の十二月八日には「今朝英米ト西太平洋ニオイテ交戦中」となります。

（二宮金次郎像と奉安殿）

昭和二十年四月十四日、校長の『訓育日誌』には、「敵機空襲シキリ」、「都市児童ト学校生活ノ実状」等と朝令での訓示の項目が列記されています。都市からの疎開児童で、どの学年も急増して八十人前後となりましたが、みな一クラスでした。戦局も急迫して、空襲警報が頻発されました。共に生名国民学校（小学校）に勤務していた村上宗子訓導は、その『訓育日誌』（五月十一日）に、「定期航空便（空襲）で授業が三時間飛んで…」と記しています。その余白に久保校長は「日本女性ノ精神力ヲモッテ職責完遂ニ…」と朱書しています。

因島の造船工場では、男女の学生が学徒動員で就業し、空襲に備えて生名島の深浦と厳島には高射砲陣地が造られ、捕虜兵士の収容所も設営されて島内は緊迫していました。

この年の八月一五日、ついに日本は降伏します。収容されていた米・英の捕虜兵士も解放され、島内を闊歩する姿を見かけた児童が、一目散に学校に走ってきて「先生、敵が歩いている」と宗子先生に報告したそうです。瀬戸内一帯にも漸く平和が回復したのです。

でも、戦時中、校長室の神棚に毎朝祈りを捧げていた久保校長は、昭和二十二年三月に、まだ五十歳でみずからその職を退きました。新しい時代を新しい決意で生き抜こうとされたのでしょうか。愛媛師範学校に入学した春のように。

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授
村上　貢　稿